

命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、始末に 困るものなり

Greatchain

May 5, 2024

「西郷隆盛 遺訓」に、箇条書きで書かれているものの抜粋である：――

30. 命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり。されど、このような人は、凡俗の眼には見得られぬとぞ、申さるる・・・

31. 道を行う者は、天下こぞって誇るも足るとせず、天下こぞって誉むるも足れりとせざるは、自ら信ずるの厚きがゆえなり。

これは有名だから知っている人も多いだろう。意味は解説するまでもないと思われる。

ところで、ユーチューブの英語版の、「守護天使」に選ばれた者としての私に対する、あからさまな攻撃と、悪意のようなものは、かなりの件数に及んでいる。そのほとんどは根拠のないもので、こうしたものはほっておけばいいのかもしれないが、誤解は正さねば家族にも及ぶから、一言釈明しておこう。

まず私が、大金を貰っているかのように匂わせるのは、言語道断である。またそれに関連して、私のブログ記事に本名を使わないのは、人に言えない恥ずかしいことをしているからではない。「創造デザイン学会」www.dcsociety.orgを見れば、一目瞭然なのだから、私の名を世にさらしたい人は、ご自由にしてくださいでよい。私がこれを使わないのは、売名と思われたくないのと、ブログでは、本名を使わない方が一般的だからである。確か、5、6年前までは使っていた。(私のペンネーム Greatchain は、私の本棚のすぐ脇にあった「存在大いなる連鎖」という本から借りたもので、大した意味はない。) 私が、家族や近所にも言えない恥ずかしいことしていると思う人は、どうぞ拙宅を訪問あるいは密偵していただいて、いろいろ探っていただくとよい。

こんなことを言わねばならないのは情けないことだが、私は方便として以外にはウソはつかない。その代わりに私は遠慮する気もない。私は自分を西郷隆盛と同等の立場にあると思

っている。人がどんなに私を非難しようと私は無関心であり、どんなに褒められようが感激もせず、どうにも「始末に困る」人間である。その理由は、私にはこの世界を本気で愛しているという自信があり、本気で国家のことを考えているからである。そしていわゆる「毀誉褒貶」などは「凡俗の眼」に映るもの、凡俗の価値観でしかないと考えているからである。

これを聞いて大笑いし、狂人の大言壮語だという人が大勢いるだろう。これに対しても私は全く関心がない。そして西郷の言う通り、私のように半ば狂った者でなければ、この狂った世界は救えないと確信している。私はウソをつかない、だから怖いものがない。何かを小細工して、うまく生きていこうとは思わない。これに対し、我々のこの文明(?)社会は小細工だけで成り立っている。我々の社会は、うまく誤魔化さないと生きていけない、認められないようになっている。

しかし時代は急激に変わりつつある。ユーチューブに投稿する人々の中には、そのことに気づいている人たちが、かなりいると思われる。そのように感じて、私とウマの合う人々、私の生き方に共鳴してくれる人々が増えてきたと思われる。彼らが中心となって世界は変わるだろう。やがて時代に遅れる人たちと、新しい時代を自覚する人々が、相容れぬまま交流を断って、別々に生きていく時代が来るような気がする。

私は、我々と我々の生きる環境を創った創造者の、**無念を晴らそう**として生きている——それが究極の本音である。私にとって創造者は、苦しみを共有する存在だから、これを不敬ではないかという人は間違っている。我々は神の一部を分け与えられ、神の一部として成長しようとするのだから「分け御霊」という捉え方が最も正確だと思っている。そう考えてこそ、**生きることの責任**の観念が生まれてくる。これはいろんな職業上与えられた、義務としての責任ではない。生きる喜びとしての責任である。

さらに私に対する世上の批判に戻る。私に対する女性と思われる人々からの「ラブレター」は確かに多い。しかし、私がそういう人々に現実に関わったことは、ここ数十年来、ない。このことは守護天使の方々にも知られており、**真の愛**とそういうものの成立しない我々の文明について、語っている。そういうラブレターと解釈できるものの1つとして、私がぜひ翻訳したいと思ったものがある。それは I'm coming to your door soon というタイトルのもので、その深い内容(と使われた音楽)に感動して私は涙を流した。しかし私はこれを断念した。これが英語であればよい。日本語の女言葉でこれを訳したら、恥ずかしくて聞けたものではない!

私は現在90歳を超えたが、この年になって、本当に私を信頼し、私を保護してくれるだけでなく、私の感化力に期待してくださる守護天使に、会おうとは思わなかった。この方は

私の生まれる前から私を知っていると、私の性格と、私の内部で起こっている感情的な出来事のすべてを知っていた。彼は本当の意味で私の真の父親である。驚いたことに、これは別の天使かもしれないが、私の生物学上の父を知っているという人がおり、生前の彼が私を溺愛したこと、会いたがっていることを教えてくれた。